

フッサールとアリソン流カント —超越論的観念論と物自体の問題—

松井 隆明

フッサールの超越論的観念論のひとつの特徴は物自体という概念の拒絶にある。フッサールは『デカルト的省察』において自らの立場を「超越論的観念論」と呼び、次のように言っていた（以下では「超越論的観念論」を「TI」、「超越論的実在論」を「TR」とする）。

この TI は、少なくとも限界概念として物自体の世界の可能性を開いたままにしておくことができると信じるような、カント的な観念論ではない。(Hua I, 118[§41])

フッサールは明らかに、物自体の概念を必要だと考えるカントの TI よりもそれを拒絶する自らの TI の方がより優れた TI であると考えている。だが、ここにはすでにいくつかの検討されるべき問題が含まれているように思われる。第一の問題は、カントとフッサールのあいだでの TI という立場の統一性にかかわる。もしカントにおいて TI という立場が物自体の概念と本質的に結びついていたのだとすると、フッサールの TI の方がカントの TI よりも優れた TI であると主張することができるような共通の TI 観はどのように確保されるのか。フッサールがカントを意識しつつ自らの立場を「TI」と呼んでいるとしても、それは単にフッサールがそう呼んでいるだけであって、両者がそれぞれ「TI」という標題の下で考えている立場のあいだには実質的な関係はないのではないか。第二に、たとえ両者のあいだで TI の統一性を確保できたとしても、物自体の概念の多義性という問題が残る。物自体の概念が多義的である以上、その拒絶ということもまたそのままでは多義的であらざるをえない。フッサールは実際のところ何を拒絶しているのか。フッサールとカントにおける TI と物自体に関してはまだいくつも検討されるべき問題があると思われるが、本稿ではさしあたりいま挙げた二つの問題に焦点を絞り、アリソンのカント解釈を参照軸として検討する。アリソンのカント解釈は、これらの問題を検討する際に利用可能な多くの資源を含んでいるとみなされる。

第一節において、われわれはまず「方法論的二側面説」と呼ばれるアリソンの物自体解釈を再構成する。次いで、物自体を必要だと考えるカントの TI と物自体を拒絶するフッサールの TI を、ともにひとつの同じ立場の二つの可能なバリエーションとみなすことができるような、そうした TI の観念をアリソンの議論から取り出すことを試みる。

第二節では、本稿に先立ってフッサールとアリソン流カントの親和性を指摘しているカーとクローウェルの研究と、それらに対するザハヴィとリーの批判を取り上げる。カーとクローウェルは、フッサールの TI はカントの TI と同様、存在論的ではなく方法論的に解釈されるべきだと主張している。われわれはこの点に関して基本的に彼らに同意するが、ザハヴィとリーはまさにこの点に関してカーらを批判している。そこで、われわれはこの批判を検討する。

カーとクローウェルの研究は、フッサールとアリソン流カントの親和性を指摘したという点では評価できるものの、その先にある重要な相違を問題にしなかったという点で不十分である。そこで第三節では、フッサールの TI とアリソン流カントの TI を物自体の問題という観点から対比させる。アリソンはいくらか慎ましい仕方で解釈することで物自体の概念を保持しようとするが、われわれは、フッサールが、アリソン流に解釈されたいくらか慎ましい物自体の概念（あるいは少なくともそれに準ずるもの）さえ拒絶していることを示す。そして最後に、そのような物自体の概念を拒絶するための理由として考えられる議論を示唆して本稿を閉じる¹。

1. アリソン流カントの TI

本節では、現象と物自体の区別に関するアリソンの解釈をまず再構成し（1.1, 1.2）、次いで、TI という立場そのものに関する彼の解釈を再構成する（1.3）。前者はフッサールが何を拒絶しているのかを明確化するための準備作業であり、後者はフッサールとカントに共通の TI 観を取り出すための実質的な作業である。

1. 1 二世界説と二側面説、存在論的解釈と方法論的解釈

「方法論的二側面説」と呼ばれるアリソンの物自体解釈に従えば、現象と物自体の区別は、われわれに認識可能な存在者と認識不可能な存在者という二種類の存在者間の区別としてではなく、われわれに認識可能な一つの同じ物を考察する異なった二種類の仕方にかかわる区別として解釈されるべきである²。アリソンの

方法論的二側面説はこれまで多くの議論の対象となってきた（cf. Wood *et al.* (2007)）。そこで、彼の解釈を詳しく見る前に、他の解釈パターンとの対比を通じて、彼の立場がどのようなものとして読まれるべきであってどのようなものとして読まれるべきではないのかをあらかじめ明確化しておくことにしたい。

現象と物自体の区別に関する諸解釈は、しばしば次のように分類される。すなわち、諸解釈はまず、この区別を（a）存在論的に異なった二種類の物ないし世界のあいだの区別として解釈するか、（b）われわれに認識可能な一つの同じ物の異なった二種類のアスペクトのあいだの区別として解釈するかに応じて、（a'）伝統的な「二対象説」ないし「二世界説」（以下では両者を「二世界説」の下にまとめる）と（b'）「二側面説」とに分類される。そして、後者の二側面説はさらに、この二種類のアスペクトの区別なるものを、（b1）一つの同じ物に帰属される異なった二種類の性質の区別とみなすか、（b2）一つの同じ物を考察する異なった二種類の仕方にかかわる区別とみなすかに応じて、（b1'）「存在論的二側面説」（ないし「性質二元論」）と（b2'）「方法論的二側面説」へと分類される。

さて、アリソン自身もこうした分類法に即して自らの立場を提示することがあるものの（cf. Allison (2006, 1) ; KTI, 16）、この分類法は、第一義的な区分が「二世界説／二側面説」のあいだに引かれるべきであり、「存在論的解釈／方法論的解釈」の区分は二側面説の内部で引かれる下位区分にすぎないという印象を与えてしまう点で、ミスリーディングである³。この分類法に従うならば、アリソンの方法論的二側面説は、二世界説に反対するための論拠とは別立てで、存在論的二側面説に反対するための論拠を用意しなければならないことになってしまう。だが、実際にはそのような必要はない。アリソンによれば、存在論的二側面説は、われわれに経験可能な物とは別の物からなるような世界を措定しないという点ではたしかに二世界説から区別されるものの、現象と物自体の区別を存在者間の区別（この場合には性質という存在者間の区別）とみなすという点では二世界説と変わらない。これに対して、アリソンの方法論的二側面説のポイントは、世界のあいだの区別であるか物のあいだの区別であるか性質のあいだの区別であるかという点にはかかわらずに、現象と物自体の区別を存在者間の区別とみなすことそのものを拒絶するという点にある（cf. Allison (2006, 1)）⁴。それゆえアリソンは、彼の議論が成功していたならば、二世界説に反対するのと同じ議論でもって存在論的二側面説を片づけることができることになる。項を改めて、「方法論的」ということでアリソンは何を意味しているのかを詳しく見ていくことにしよう。

1. 2 現象と物自体の超越論的区別

方法論的解釈のポイントは、現象と物自体の区別はどのような文脈に登場する区別なのかということに関する考察のうちにある。アリソンによれば、現象と物自体の区別は、世界のあり方について直接何かを主張する一階の考察のうちに登場するような区別ではない。それゆえ、この区別によって、存在者（どのような種類のものであれ）を認識可能なもののクラスと認識不可能なもののクラスへと分類することが意図されているのではない。そうではなく、この区別は、諸対象についてのわれわれの認識様式をその考察対象とするようなメタレベルでの考察において——カントの用語で言えば「超越論的認識」（KrV, A11f/B25）において——はじめて導入されるような区別である。そのような文脈に登場するものとして、「物自体（Ding an sich）」は「それ自体そのもので考察された物（Ding an sich selbst betrachtet）」の省略表現とみなされ、「物自体」における「自体（an sich）」は、物の種類を表すものではなく、物が考察される仕方の種類を副詞的に特徴づけるものとみなされる⁵。

以上のような考察に基づいて、アリソンは現象と物自体をそれぞれ次のように解釈する。すなわち、物は、それがわれわれの感性の形式に従ってわれわれに現れるものとして考察されるかぎりで、「現象」と呼ばれるのであり、また、その同じ物は、それがわれわれに現れるための感性の形式を捨象して独立に考察されるかぎりで、「物自体」と呼ばれるのである、と。後者の「物がわれわれの感性の形式から独立に考察される」とは、「物が純粹悟性の対象として考察されること」だと説明されるが、ここで言われていることは、物がいわば神の視点から考察されること、あるいは少なくとも、われわれとは「ラディカルに異なった視点」（KTI, 45）から考察されること、とほとんど同義であると理解してよいと思われる。実際、アリソンは、ここでの対比を直感的に理解可能にするために、時間的に継起する有限なわれわれの視点と無時間的に一切を把握する全能なる神の視点の対比という例に訴えている（cf. KTI, 44f.）。要するに、方法論的解釈によれば、現象とは、われわれの感性の形式に従ってわれわれに現れるものとして考察されたかぎりでの物のことであり、また、物自体とは、われわれに現れる物と同一であるが、しかしいわば神の視点から考察された、そのかぎりでの物のことなのである。

もちろんアリソンは、以上のように解釈することによって、神の視点を備えた存在者が現実に存在することを認めるような立場にカントをコミットさせようとしているわけではない。カントはそうした存在者が現実に存在する可能性を肯定も否定もしない。また、そのような視点から考察されたかぎりでの物という概念

（＝物自体）も何らかの積極的な内容をもつわけではない。それは、カント自身がそう言うように、単に「限界概念」（KrV, A255/B311f.; KTI, 58）でしかない。

以上のような仕方で解釈するならば、物自体についてのカントの語りはたしかに無害なものになるかもしれない。だが、それによって、アリソンの方法論的解釈は今度は次のような疑念に直面するように思われる。すなわち、上のように解釈されたとき、物自体という概念は、単に無害なだけでなく、もはや何の意義ももたない空虚な概念になってしまっていないだろうか。もし空虚なものになってしまっているのだとすると、そのような概念を捨て去ることを妨げるどのような理由が残されているだろうか、と。われわれは、この疑念に対するアリソンの回答と思われるものを第三節で見ることにする。

1. 3 メタ哲学的立場としての TI

われわれは、アリソンの方法論的解釈を、現象と物自体の区別に関するものとして見てきた。だがアリソンは、この区別に関してだけでなく、TI という立場そのものに関しても、存在論的にはなく方法論的に理解されるべきだと主張している。そして、この主張をサポートするために、彼は「弁証論」における TI の「間接的証明」（KrV, A506/B534）を引き合いに出す（cf. KTI, xv-xvii, 21-38, 388-95; Allison (2006, 1-7, 13-7)）。ここでのアリソンの議論は、部分的には、前項の末尾で挙げられた疑念に対する回答となることを意図したものである。だが彼自身の意図とは独立に、ここでの彼の議論は、TI という立場をどのようなものとして理解すべきかというわれわれの問題に関しても重要な洞察を含んでいる。われわれは、ここでの彼の議論を、現象と物自体の区別に関する議論から切り離すことで、フッサールとカントに共通の TI の観念を確保することを試みようと思う。

TI の間接的証明とは、「弁証論」における TR の否定を通じた TI の証明のことを指す。こうした背理法による証明がそもそも成立しうるためには、TR と TI はある問題に関して相互に排他的で包括的な立場を構成していなければならない。だが、両者の対立をこのようなものとして描くことには困難がある、とアリソンは指摘する。問題は、一見するとカントが「TR」というラベルの下に全く異なった立場の哲学者たちを雑多に押し込めているように見える、という点に存する。もし実際に TR がさまざまな哲学者の単なる寄せ集めにすぎないのだとすると、それを否定することによって TI を導くということができなくなってしまうのである。かくして、TI の間接的証明と称されているものが実際に成立していると主張することができるためには、まずは TR という立場の統一性が何に存するとカ

ントがみなしていたのかを示すことができなければならないことになる。カントによって批判・非難された哲学者の集合としてしか TR を描くことができなければ、その解釈は論点先取を犯していることになってしまうのである。

以上のような議論を背景に、アリソンは、存在者についての特定の一階の主張によって TR の統一性を確保しようとする試みは失敗すると考える。つまり、アリソンによれば、カントの意図は、少なくとも第一義的には、この世界にはどのような種類の存在者が存在するのかとか、認識の対象はどのような身分をもつのかといった類の問題に関する特定の立場を否定することにあつたのではない。そこでアリソンは、TR の統一性を、存在者に関する特定の主張によってではなく、その主張の背後にある共通の前提によって、つまり、さまざまな形而上学的問題や認識論の問題が取り組まれる際の共通の枠組みによって特徴づけることを提案する。TR は、哲学の方法論のレベルにおける、あるいは「メタ哲学的」(KTI, xv, 20) なレベルにおける共通の前提によって理解されるべきなのである。そして、一度 TR がこのような仕方の特徴づけられたならば、その否定によって得られる TI も同様に方法的ないしメタ哲学的に特徴づけられることになる。以上が、TI の間接的証明に関するアリソンの解釈の基本的な戦略である。

では、TR と TI の対立は具体的にはどのように描かれるべきなのか。アリソンはまず、TR を、彼が「認識の神中心モデル」と呼ぶ立場への（少なくとも暗黙的な）コミットメントによって特徴づける (cf. KTI, 27-38)。そして彼は、TR をこのように特徴づける際のポイントが「規範性」という点にあることを強調している。われわれは、ここでアリソンが言わんとしていることを、大まかではあるが次のように理解する。すなわち、TR に属する哲学者たちは、「直観」や「概念」、「対象」といった基礎概念のいくつかを神の視点に定位して定義してしまっている。そのため彼らは、われわれの認識（経験的な認識であれ存在論的な認識であれ）と世界のあいだに想定されるべき規範的な関係性が問題になったときに、それを適切に扱うことができない、と⁶。アリソンは、「認識の神中心モデル」によって TR を特徴づけた後、これの否定であるとされる「認識の人間中心モデル」によって TI を特徴づける⁷。すなわち、TI は、われわれの認識活動に対する規範的な力を神の視点に認めないような仕方、諸概念をわれわれの認識の形式に相対的なものとして定義する。そうすることで、TI は、諸対象についての存在論的と称されている認識を、われわれが世界を認識する際の条件ないし規則を分析することによって獲得することができる⁸。このようにして、TI は、もはや伝統的な存在論の内部でひとつの新たな代案を提示しているものとしてでは

なく、そうした存在論のやり方そのものに対する代案を提唱しているものとみなされるのである（cf. KTI, 98, 120; Allison (2006, 7) ; Wood *et al.* (2007, 37)）。

さて、以上で粗描されたアリソンの TI の特徴づけに関して、ここでは次の二点を指摘しておきたい。一点目は、前項で見た現象と物自体の区別という問題と、本項で見た TI と TR の対立という問題の関係にかかわる。われわれはこれまで、アリソンが前者に関して後者に関して存在論的ではなく方法論的に理解されるべきだと主張していることを見てきた。だが実際には、彼は、両方に関してそう主張しているというよりは、そもそも二つの問題が区別可能であるとは考えていないように見える。現象と物自体の区別においても TI と TR の対立においてもメタレベルでの考察が問題になっているという意味では、たしかに二つの問題は同じかもしれない。だが、TR の否定によって TI を方法論的に特徴づけるという方針を受け容れながら、にもかかわらず、方法論的に理解された物自体の概念を拒絶するということが可能であるように思われる（第三節で見るように、実際フッサールの立場はそのようなものとして解釈できる）。それゆえ、両者はひとまず問題として区別されるべきである。われわれは、方法論的に理解された物自体の概念を拒絶すべきかどうかという問題をさしあたり脇に置いた上で、二つの問題の区別を際立たせるために、用語法の上でも区別をすることにしよう。以下では、「方法論的」という表現をもっぱら現象と物自体の区別に限定して用いることにし、TI と TR の対立には、アリソン自身もしばしばそうするように、「メタ哲学的」という表現を用いることにする。このとき、物自体の概念を必要だと考えるカントの TI とそれを拒絶するフッサールの TI は、ともにひとつの同じ立場の、つまり TR との対比の下でメタ哲学的に理解された TI の、二つの可能なバリエーションとみなされることができ、TI を TR と対比させる際に用いられている「認識の神中心モデル」という概念が、その否定によって TI を規定するにはまだいくらか曖昧であるというのはたしかに事実である。だが、このことによってここで問題になっている対比そのものが無効になるわけではない。本稿の目的にとっては、フッサールとカントのあいだで物自体の問題から独立に TI の統一性を確保するための一定の方針を示すことができたならば、ひとまずそれで十分である。

第二に、「TI は存在論的ではなくメタ哲学的に理解されるべきだ」というアリソンの主張は、「TI は存在論と何の関係ももたない」という意味で受け取られるかもしれないが（実際そう受け取られることもあるが）、決してそう受け取られるべきではない⁹。第一義的にはメタ哲学的な考察にもとづいて定義されるとしても、TI は、TR の否定によって定義される以上、それによって一定の存在論的な

いし形而上学的な含意を引き受けなければならないことになる。アリソンはこうした方向性へと積極的に議論を展開することはないが、それでも TI が一定の形而上学的含意をもつということ自体は認めている (Allison 2006, 19n2, 22n14; Wood *et al.* 2007, 37)。さらに、TR を拒絶することによって TI が必然的に引き受けなければならないような類の形而上学的含意を「TI の定義的な形而上学的含意」と呼ぶとすると、TI はそれが取るさまざまなバリエーションに応じてさまざまな特殊な形而上学的含意をもつことになるだろう。方法論的に理解された物自体の概念へとコミットするすべての TI が引き受けなければならないわけではないかもしれないが、少なくともアリソン流カントの TI は引き受けることになる、そうした特殊な形而上学的含意と思われるものを、われわれは第三節において見る。

2. フッサールの TI の形而上学的身分をめぐる論争

本節では、本稿に先立ってフッサールとアリソン流カントの親和性を指摘しているカーとクローウェルの研究と、それらに対するザハヴィとリーの批判を取り上げる。カーとクローウェルは、フッサールの TI は、カントの TI と同様、存在論的にではなく方法論的に——「方法論的」という語のカーらの用法はいくらかルーズであるが、われわれの用語法で言えば「メタ哲学的に」——理解されるべきだと主張した (cf. Carr (1999, ch. 4) ; Crowell (2001, ch. 12))。これに対してザハヴィとリーは、カーとクローウェルが「形而上学的中立性」という立場をフッサールに帰属させているとみなし、フッサールにそのような立場を帰属させることは誤りであると批判した。フッサールの TI は第一義的にはメタ哲学的なものとして理解されるべきだという点にかぎって言えば、われわれはカーらに同意する。そこでわれわれは、ザハヴィらの批判は誤解に基づくものであり、それゆえフッサールの TI をメタ哲学的に理解するという解釈方針を妨げるものではないということをここで示したい。ザハヴィらの批判の論点を整理すると次のようになる。

(1) 現象学的還元に関して。還元によって実在との関係が断ち切られてしまうわけではないので、フッサールの現象学は実在にかかわる (Zahavi 2003, 7-14, 16; Lee 2007, 453-5)。 (2) 形而上学的含意に関して。フッサールの TI は、形而上学的実在論 (TR とほぼ同様の立場であるとみなしてよいと考えられる) の拒絶という消極的含意をもつ (Zahavi 2010, 85, 87)。 (3) テキスト上の根拠。フッサールは形而上学について積極的な発言をしている (Lee 2007; Zahavi 2003, 12, 2010, 79)。順に見ていくことにしよう。

まず(1)に関してであるが、カーらは、ザハヴィの見立てとは異なり、現象学的還元によって実在が現象学の考察対象から除外されるとは言っていない。彼らはただ、アリソン流カントと同様に、実在についての一階の考察から、実在についての経験をその対象とするメタレベルの考察へと移行すると言っているだけである (cf. Carr (1999, 109) ; Crowell (2001, 236f.))。そして、われわれもそのように考える¹⁰。それゆえ、ここでのザハヴィの批判は誤解にもとづいたものでしかなく、主張としては正しいとしても、批判としては成立していない。

次に(2)に関してであるが、「TIは存在論的ではなくメタ哲学的に理解されるべきだ」という主張と「TIはTRの否定という形而上学的含意をもつ」という主張が矛盾しないことは前節で確認したとおりである。それゆえ、ザハヴィの議論はここでも誤解に基づいたものであり、批判として成立していない¹¹。

三種類の論拠のうち、尊重されるべきは(3)である。リーが指摘するように、フッサールは『デカルト的省察』最終節(第64節)において次のように強調している。

最後に、誤解が生じないように次のことを指摘しておきたい。すでに詳述したように、現象学は、不合理な物自体を扱うような、素朴な形而上学をすべて排除するだけであって、形而上学一般を排除するのではない。(Hua I, 182)

フッサールがここで念頭に置いているのは、彼が「形而上学的成果」を論じた同書第60節であろう。彼はそこで次のように述べていた。

究極的な存在認識が「形而上学的」と呼ばれるべきだというのが真であるとすると、われわれの探究の「モノダ論的」な成果は形而上学的である。しかし、ここで問題になっているのは通常の意味での形而上学では決してない。通常形而上学は歴史的に墮落した形而上学であり、それは、形而上学が「第一哲学」として最初に創設されたときの意味に適うものではない。(Hua I, 166)

これらのテキストからはある種の形而上学に対するフッサールの積極的な姿勢を窺うことができる¹²。これはたしかに尊重されるべき点である。とはいえ、われわれは、第一義的にはメタ哲学的な立場として理解されたTIが一定の形而上学的含意をもつということを手前認めているので、フッサールが「形而上学」とい

う言葉を積極的に用いているというだけでは批判の論拠とはならない。フッサールがここで念頭に置いている形而上学とは、彼の枠組みで言えば、可能なもの一般を扱う「第一哲学」に対置される、現実的なものを扱う「第二哲学」のことであると思われるが¹³、これはわれわれの立場でも難なく受け容れることができるものである。したがってここでの批判も批判として成立していない。

以上より、ザハヴィとリーの議論は、フッサールの TI をメタ哲学的に理解するという解釈方針を妨げるものではないとすることができる。他方で、カーとクローウェルの研究に関しては、われわれは次のように考える。カントの TI と同様、フッサールの TI もメタ哲学的に理解されるべきだと主張した点においては、彼らは正しい。だが、メタ哲学的に理解された TI というひとつの同じ立場の内部でフッサールとカントの対立を描くところまで議論を展開しなかったという点で、彼らの仕事は不十分である、と。次節の課題は、このようなものとしてのフッサールとアリソン流カントの対立を、まさに物自体の問題に関して描くことである。

3. 物自体なしで TI を採る

冒頭で確認したように、フッサールはたしかに物自体の概念を拒絶している。だが、物自体の概念は多義的であるので、フッサールが実際に何を拒絶しているのかが明らかにされないかぎり、物自体の拒絶ということもまた多義的なままにとどまる。仮にフッサールが拒絶しようとしているものが二世界説的に理解された物自体にすぎないのだとすると、その場合には、フッサールの TI は本質的な点においてアリソン流カントの TI とそれほど変わらないということにもなりかねない。本節では、フッサールが、方法論的に理解された物自体（あるいは少なくともそれに準ずるもの）さえも認めていないことを示す。そして、その理由として考えられる議論を示唆することにする（以下では「方法論的に理解された物自体」を「方法論的な物自体」と略記する）。

物自体の拒絶に関連すると考えられるフッサールのテキストを見ていこう。まずは、しばしば引用される、そしてわれわれ自身も冒頭で引用した、『デカルト的省察』第 41 節からの一文を再び取り上げたい。

この TI は、少なくとも限界概念として物自体の世界の可能性を開いたままにしておくことができると信じるような、カント的な観念論ではない。(Hua I, 118)

フッサールはここで、自らの TI が物自体を「限界概念」としてすら受け容れないことを宣言している。だが、「物自体の世界」という表現が示唆するように、物自体はここでは二世界説的に理解されているようにも見える。いずれにせよ、この一節からだけではフッサールが何を拒絶しようとしているのかを特定するのは不可能である。そこで、より実質的な議論を彼の草稿のなかに求めることにしたい。

次の一節は、TI に関する 1908 年の研究草稿からのものである。

経験的な存在の本質には、それについての別の所与性を期待したり要求したりすることは無意味であるということが属している。(Hua XXXVI, 32)

ここでの「経験的な存在」とは、典型的にはわれわれが見たり触れたりすることのできる物のことであり、アリソン流カントにおける「現象」におおむね対応する。そして、「別の所与性」とは、アリソン流カントにおけるわれわれとは「ラディカルに異なった視点」(KTI, 45) の類比物であると理解してよい。後者の点は別の草稿を参照することによって裏づけることができる。たとえば 1915 年の講義草稿「現象学の精選問題」では、神の無時間的な視点の空間版であるような、神のいわば遍在的な視点の可能性が検討され、そのような視点は意味に反するものだと結論されている (Hua XXXVI, 93)¹⁴。つまり、フッサールはこれらのテキストにおいて、物に対するわれわれとはラディカルに異なった視点が存在する可能性を拒絶しているのである (cf. Hua XXXVI, 66-7)¹⁵。ここから、フッサールはそのような視点の相関者である方法論的な物自体を拒絶していると言うことができる。

とはいえ、方法論的な物自体の概念は一見すると穏健なものであるように見える。なぜフッサールはこれさえも拒絶する必要があると考えるのだろうか。最後にこの点を検討することにしたい。まず注意しなければならないのは、カントが神との対比において「人間」としてのわれわれについて語り、諸概念を後者の視点に相対的なものとして定義するときでも、そこで問題になっているのはわれわれの認識の「形式」であって「実質」（たとえば生理学的な機構）ではないという点である¹⁶。それゆえ、方法論的な物自体を拒絶するための議論は、いわゆる心理学主義批判のような類の議論とは別のところに求められなければならない。

方法論的な物自体の概念を拒絶するための理由として、まずはこの概念の空虚さを挙げることができるかもしれない。すなわち、方法論的に解釈することで、物自体の概念はたしかに無害なものになる。だがそのとき、物自体の概念を捨て

去ることを妨げる理由などないのではないかと。この問題に対するアリソンの回答はおそらく、物をわれわれの視点から考察するということのうちにはすでに、その同じ物をわれわれとは別の視点から考察するということが含まれている、というものであると思われる (cf. KTI, 56f.)。アリソンのこうした回答に対しては、そのようなことが本当に含まれているかどうかという点に関してさらに争うことができるかもしれない。とはいえ、こうした議論によっては、せいぜい方法論的な物自体の概念は必要でないということしか示すことができないだろう。

われわれは、方法論的な物自体の概念の空虚さに訴えるのではなく、むしろ次のように問うことにしたい。アリソンの方法論的解釈の要点は、われわれに経験可能な物と同じ物が、われわれとはラディカルに異なった視点からも考察されうる、ということに基づいているのであった。だが、同じ物がラディカルに異なった視点からも考察されうると言われる際に用いられている「同じ」や「物」といった概念はそもそもどのような概念なのか、と。問題は、ここで想定されている視点の相違というものが、程度における相違ではなく形式における相違であり、しかもそれがラディカルな相違であるという点に存する。つまり、われわれがそれについての経験をもつところの、時間的に持続し空間的に奥行きのあるこの物と「同じ物」を無時間的・遍在的な視点から考察すると言われるとき、それはどのような意味で「同じ」「物」なのか、というのがここでの問題である。

この問いに対するひとつの回答は「捨象」という操作に訴えるものだろう。すなわち、方法論的な物自体とはわれわれに経験可能な物からわれわれの感性に由来するものを捨象することによって得られるものなのだから、それはわれわれに経験可能な物とは別の物ではなくまさに同じ物なのだ、と。だが、ここで捨象されると言われているところのものは、まさにわれわれにとっての物の個別化にかかわるような条件である。それゆえ、アリソン自身も言うように、ここでは現象と物自体のあいだに一対一対応を想定することはできない (cf. KTI, 459n19)。こうしてアリソンは、「超越論的対象」という概念 (精確にはそのいくつかの異なった用法のひとつ) に訴えることになる。「二つの観点から考察されるものとは超越論的対象である」(KTI, 61)。そして、この意味での超越論的対象とは、「完全に未規定的な」「或るもの一般=X」であると言われる (KTI, 62, 61)。アリソン流カントの TI は、方法論的な物自体の概念へとコミットすることの帰結として、まさにこうしたものを想定せざるをえなくなってしまうのである。物自体の概念へと方法論的にコミットするようなタイプのすべての TI がこうしたものを想定しなければならないかどうかという点に関しては議論の余地があると思われるが、少

なくともここに困難があることは確かだろう。これに対して、方法論的な物自体の概念を拒絶するフッサールはこうした困難に巻き込まれずに済む。フッサールにとって、「対象」というのは「つねに意識の本質連関のための標題である」（III/1, 336[Ideen I §145]）からである。

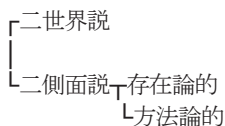
結

われわれはこれまでアリソン流カントを参照軸としてフッサールの「物自体を拒絶する TI」を検討してきた。TI という立場をメタ哲学的な考察とその形而上学的含意という二つの軸から検討するという方針は、今後、フッサールのテキストにより即するかたちで具体的に展開されなければならないだろう¹⁷。また、アリソン流カントを参照軸としてきたことの結果として、われわれは、アリソンが重く取らない、物自体のもうひとつの側面、すなわち現象の「原因」ないし「根拠」という側面には全く触れることができなかった。アリソンの強い影響力に対する反動で、近年、物自体のこうした側面を強調する研究者が一定数いる以上、現象の「原因」ないし「根拠」としての物自体を拒絶するという意味も改めて検討される必要がある。この点に関しては稿を改めて論じることにしたい。

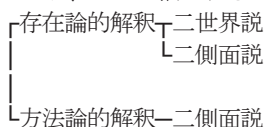
¹ カントにおいては、物自体の概念および TI は「自由」の問題とも結びついているが、自由の問題は本稿が問題にする論点からはさしあたり分離可能であるように思われるので、以下ではこの問題を脇に置いて議論を進める。

² もっとも、「方法論的二側面説」と呼ばれるような解釈それ自体はアリソンのオリジナルではなく、バードやプラウスといった先駆者となるカント研究者がいる。アリソンの功績は、この解釈を徹底的に展開し擁護することを試みた点にある。

³ つまり、次のような描像が示唆されてしまう。



⁴ つまり、ここで描かれるべき描像は次のようなものである。



⁵ アリソンはこの点をプラウスの文献学的研究に負っている (cf. KTI, 51f.; Prauss (1974, 42f.)).

⁶ このような特徴づけが TR に属すとされる哲学者すべてに、とりわけいわゆる経験論の伝統に属する哲学者たちに当てはまるのかどうかは議論の余地があるように思われるが、アリソンはこうした疑念に対しても自説を擁護することができると考えている (cf. KTI, 29, 31f., 37f.)。

⁷ アリソンは TR と TI の対立を時空的述語の適用範囲に関する対立として描くこともあるが (cf. Allison (2006))、彼は、この議論も最終的には認識の神中心モデルと人間中心モデルの対立

に帰着すると考えているように見える (cf. KTI, 118-22)。

⁸ 「存在論という尊大な名称 [...] は、純粹悟性の単なる分析論という慎ましい名称に席を譲らなければならない」 (KrV, A247/B303)。

⁹ たとえばガイヤーはそのように理解している (Wood *et al.* 2007, 14-8)。

¹⁰ 現象学的還元に関する私自身の解釈は、松井 (forthcoming) で提示した。

¹¹ カーはたしかに「形而上学的に中立的」という表現を用いている (Carr 1999, 112)。とはいえその場合でも、それはザハヴィの理解とは異なった意味においてであるように思われる。つまり、カーの言う「形而上学的中立性」とは、ミスリーディングではあるが、単に実在について直接何かを主張するような一階の形而上学ではないというだけであって、形而上学と全く関わりをもたないという意味ではないと思われる (cf. Carr (1999, 113))。

¹² 現象学と形而上学の関係に関する、公刊著作におけるフッサールの肯定的な発言は、『イデー I』序論、同第 82 節、同「あとがき」などにも見出される (cf. Hua III/1, 8, 184; V, 140f.)。

¹³ ここで問題になっている形而上学はそれゆえ、世界構成のいわゆる原事実性に関する「新しい意味での形而上学」のことではない。両者の相違に関しては Kern (1996) を、後者の詳細に関しては Kern (1964, 293-303) を参照。

¹⁴ 関連するいくつかのテキストは、Kern (1964, 126f.) でも取り上げられている。

¹⁵ フッサールがここで想定し拒絶している視点は、実際にはアリソンが想定している視点ほどラディカルなものではないが、いずれにせよここで意図されているのは、われわれとはラディカルに異なった視点が存在する可能性を拒絶することである。

¹⁶ 「われわれの感官が粗雑であるということは、可能な経験一般の形式になんらかかわることではない」 (KrV, A226/B273)。

¹⁷ 私は松井 (forthcoming) においてそうした展開を部分的に試みた。

[参考文献]

- Allison, Henry E. 2004. *Kant's Transcendental Idealism*, revised and enlarged edn, Yale UP. (KTI)
- . 2006. “Transcendental Realism, Empirical Realism, and Transcendental Idealism,” in *Kantian Review*, 11, 1-28.
- Carr, David. 1999. *The Paradox of Subjectivity*, Oxford UP.
- Crowell, Steven G. 2001. *Husserl, Heidegger, and the Space of Meaning*, Northwestern UP.
- Husserl, Edmund. 1950-. *Husserliana Gesammelte Werke*, Nijhof/Kluwer/Springer. (Hua)
- Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner. (Orig. pub. 1781/87.) (KrV)
- Kern, Iso. 1964. *Husserl und Kant*, Nijhof.
- . 1996. “Erste und Zweite Philosophie (Transzendente Phänomenologie und Metaphysik),” in *Edmund Husserl*, 2nd edn, eds. R. Bernet, I. Kern, & E. Marbach, Meiner, 209-13.
- Lee, Nam I. 2007. “Husserl's View of Metaphysics,” in *Phenomenology 2005: Selected Essays from Asia*, Part 2, eds. Ch.-F. Cheung & Ch.-Ch. Yu, Zeta, 441-62.
- Pruss, Gerold. 1974. *Kant und das Problem der Dinge an sich*, Bouvier.
- Wood, Allen, Guyer, Paul, & Allison, Henry E. 2007. “Debating Allison on Transcendental Idealism,” in *Kantian Review*, 12(2), 1-39.
- Zahavi, Dan. 2003. “Phenomenology and Metaphysics,” in *Metaphysics, Facticity, Interpretation*, eds. D. Zahavi, S. Heinämaa, & H. Ruin, Kluwer, 3-22.
- . 2010. “Husserl and the ‘Absolute’,” in *Philosophy, Phenomenology, Science*, eds. C. Ierna, H. Jacobs, & F. Mattes, Springer, 71-92.
- 松井隆明. forthcoming. 「現象学的還元と構成の問題——フッサール超越論的観念論の基本的構図」, 『フッサール研究』12.